

五月二日

朝、学生と共にワークショップの材料を調達すべく町へ出る。メタルメツシユの店があつてその種類の多さに感心する。昼食は学内のレストラン。午後先生方との公開座談会。夕方、学生の仕事をみて、夕食は町で客家料理。李祖原が夕食を気にしてくれて来てくれた。わたしのインタビュー記事がチャイナタイムズに出ていて知らせてくれた。

曾先生がオーナーのワインバーでワインを少し飲んで宿舎へ。疲れがとれてきた。

そう言えば昼にイフエイ・チャンが台北からわざわざ来てくれて久し振りの再会。イエール大学でのレクチャーでの出会い、そしてTOKYOでの私のスタッフとしての一年半を介して思うのだが、二〇歳をこえたら人間はもう変わらない。あのママで行けるところまで行けば良い。

一〇日には上海へ仕事を移すということでC・Y・LEEに紹介する。張伊珩の上海での成功を祈りたい。中原大学では李祖原は時々批判の対象になっているようだ。アカデミーで批判されるのは建築家にとっては誇りである場合もあるから、それを知ってどうと言う事もない。

五月三日

朝八時三〇分学生の仕事をみて、九時第二回目のレクチャー。自作を中心に三時間のレクチャーで少し疲れた。明日の台北市で

のオープンレクチャーのプログラムが少し気になる。昼食後宿舎で休む。台湾に来て六日目だが疲れは峠を越した。何よりも時差がなくて熟睡できるのがあるがたい。そんな意味でもアジア地域での仕事はアメリカ、ヨーロッパでの仕事よりも私には合理的であるような気もするが、マそれはこれからの問題だ。

五月四日

朝はゆっくり十時まで寝た。昼食後、車で三〇分程の大溪、新南老街を案内していただく。台湾、日本共に明治大正の建築は面白かった。それぞれに個有の文化と外来文化とが本気で衝突していた。それは実ワ、いつの時代にもあつた事なのだが、それが生々しいところがこの時代の良さだった。でき上がりは要するにキツチュなのだが、キツチュがキツチュのお決まりの枠を踏み越えてしまっているのが良い。

それと比較すれば今の建築は発散しているエネルギーが小さい。細部への努力が変な方向へ行ってしまうてる。それと、最も重大なのは装飾の可能性を放棄し続けていることだろう。コンピュータの能力はきわめて装飾的なものへと向うだろう。

午後三時半より講評会。中庭で。

中原大学5年生は最後になって良く頑張った。学生は眠っちゃ駄目、ハードにヤレのアジテーションを正面から受け取めた。彼等にとって私は異人で、普段の生活に突如侵入してきた他者だ。私に最も適した役割だが、それがミニマムなスケールで良く機能した。

彼等のセルフビルドのオブジェクトがこれからどんな意味を持つか。教育の面白いところだろう。教育は建築設計と同じに実に興味ある仕事だ。

夕方六時より学生、先生たちときよならディナー。良い四日間

だった。ディナーの後、車で台北市へ。夜十時市内のホテル着。明日のオープンレクチャーはこのホテルの一階のようで楽だ。

五月五日

久し振りの午前中の空白タイム。午後のレクチャーの準備。午後一時からのレクチャーには李祖原も来て二時間。来場者は多くなかったが、自分の考えを述べた。李祖原の建築についても触れた。そうする事で私と彼の共有するモノと、それぞれの立場を明快にしてゆく必要がある。

これから、アジア、特に中国の仕事をしてゆく為にはそれは必然だ。

夕食は台北市建築師協会の幹部達と。李が食べるなど言うので、ひかえた。中原大学生も参加して、又もサヨナラのあいさつ。夕食後李に連れられて本格的なアワビ料理へ、上等な味であったが、流石に二度の夕食はつらい。折角の美味の大半を残してしまった。李祖原とこれからの戦略について率直に話し合う。夕食後、ホテルのバーに席を移し、話を続ける。建築家同士の話はやっぱり全部建築の話になってしまう。しかし、楽しかった。

五月六日

朝、ホテルにイフエイが来て、彼女の台北での仕事を見て廻る。上海に行くのは矢張り相当な覚悟のようで、なんとか成功してもらいたい。昼食は中山グランドホテルで飲茶。李が車とドライバーを終日つけてくれて、助かった。桃園空港より中華航空でTOKYOへ。羽田着後、機体トラブルで荷物の受取りが遅れたが、深夜に世田谷に辿り着いた。まことにハードなゴールデンウィークであった。

五月七日

フランス行はキャンセル。

午後、馬場昭道、佐藤健と新真栄寺建設の予定サイトへ。

五月十日

夕方、建築会館で批評と理論シンポジウム出席。その後、磯崎、福田和也、鈴木氏等とイタリア料理屋で会食。磯崎さんの元気に仰天する。